徳洲会グループ
TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP

発行
一般社団法人徳洲会
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL：03-3262-3133

制作
一般社団法人徳洲会　広報部
TEL：03-3288-5580　FAX：03-3263-8125
Email：news@tokushukai.jp

ALL LIVING BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS

No.1565

湘南鎌倉総合病院

高度医療と若手育成を推進

ダヴィンチ5・SPを新たに導入

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）は、手術支援ロボット「ダヴィンチ 5」と単孔式の「ダヴィンチ SP」を新たに導入した。同院はこれまでダヴィンチ Xi とダヴィンチ 5 の 2 台体制で運用を行ってきた（Xi は湘南大磯病院に移設）。今回の追加導入により、計 3 台体制と拡充。さらなるロボット体制強化により、地域でのロボット手術の牽引役として、新たな一歩を踏み出した。



「ダヴィンチSPは消化器外科手術で威力を発揮します」と細田センター長



ダヴィンチSPの1例目で胃がんに対する手術を行う細田センター長

細田桂・上部消化管外科部長兼ロボット手術センター長は、「これまではダヴィンチ 5 と Xi の 2 台で運用してきましたが、ダヴィンチ 5 での手術を希望する診療科が多く、並列で手術が入ると使えないという状況が起きていました。そこで、ダヴィンチ 5 をさらに 1 台増やして、環境を整えたほうが良いと判断しました」と明かす。

また、新たに導入したダヴィンチ SP は、徳洲会グループでは中部徳洲会病院（沖縄県）に次ぎ 2 施設目。既存のダヴィンチが複数のロボットアームから成るマルチポート（多孔式）であるのに対し、ダヴィンチ SP はロボットアームが 1 本のシングルポート（単孔式）。そのため切開創が最少 1 カ所ですみ、患者さんの負担軽減や整容性の向上が期待できる。

細田センター長はダヴィンチ SP 導入の経緯について、「もともと単孔式手術とロボット技術は非常に相性が良いと感じており、この技術による操作性の向上は、消化器外科手術で威力を発揮すると考えていました」と力を込める。

8 月にダヴィンチ SP の運用に向けた手術室の改修工事やトレーニングを実施。シミュレーターによる訓練や生体組織を用いたトレーニング、先行施設への見学などを重ね、安全な稼働に向けて入念な準備を行った。同機を使用するのは、上部・下部消化器外科をはじめ、呼吸器外科の縦隔腫瘍や泌尿器科など幅広く想定。1 例目は 9 月 15 日に胃がん患者さんに行い、奏功。

細田センター長は「ダヴィンチ SP は国内でも、まだ導入施設が限定的であり、どの疾患に最も適しているかという確立されたガイドラインは、これからの段階です。まずは安全性の高い手術から慎重に開始し、患者さんの低侵襲性や整容性を確保しながら、可能性を探っていきたいと考えています」と展望する。

同院では現在、消化器外科（上部・下部・肝胆膵）、泌尿器科、婦人科、呼吸器外科、移植外科など多岐にわたる診療科で、ロボット手術を精力的に実施。2025 年 8 月から 26 年 9 月までのロボット手術件数は 473 件に上り、過去最多の実績を記録した。

年間 500 件の大台も見えてきているが、細田センター長は「現在、手術室や麻酔科医、看護師など医療スタッフもフル稼働している状態です。ここを改善し、ロボット手術の割合を高め、より精度の高い手術を数多く提供していきたいと考えています」と課題と目標を示す。

若手医師の教育にも大きなメリットがある。同院が有するダヴィンチ 5 にはコンソール（操作台）が 2 台備わっており、指導医と若手医師が同時に、同じ 3D 画面を見ながら指導・執刀を行うことが可能。

「若い医師はゲーム世代ということもあり、手技の飲み込みが非常に早いと思います。当院では、専攻医 3 年目で、大腸手術などの主要な操作を担当することもあります。指導医の監視の下、安全に執刀できる環境が整っています」（細田センター長）。

最新機器を備えた教育環境は、全国から優秀な若手医師を吸引するアピールポイントだ。

同院はロボット 3 台体制により、高度医療の提供と若手育成の両輪をさらに加速させていく方針だ。

徳洲会グループの手術支援ロボット導入施設（30施設40台）

●ダヴィンチ
宇治徳洲会病院（京都府）※2台導入
名古屋徳洲会総合病院
松原徳洲会病院（大阪府）
湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）
湘南鎌倉総合病院（神奈川県）※3台導入
鎌ケ谷総合病院（千葉県）
中部徳洲会病院（沖縄県）※2台導入
岸和田徳洲会病院（大阪府）
野崎徳洲会病院（大阪府）
千葉徳洲会病院　※2台導入
千葉西総合病院　※3台導入
吹田徳洲会病院（大阪府）
成田富里徳洲会病院（千葉県）
茅ヶ崎徳洲会病院（神奈川県）
福岡徳洲会病院
和泉市立総合医療センター（大阪府）※2台導入
八尾徳洲会総合病院（大阪府）
大和徳洲会病院（神奈川県）
羽生総合病院（埼玉県）
仙台徳洲会病院
四街道徳洲会病院（千葉県）
湘南厚木病院（神奈川県）
野田総合病院（千葉県）
湘南大磯病院（神奈川県）
札幌徳洲会病院
●hinotori
武蔵野徳洲会病院（東京都）
南部徳洲会病院（沖縄県）
東京西徳洲会病院
●ヒューゴ
宇治徳洲会病院（京都府）
●サロア
榛原総合病院（静岡県）
大垣徳洲会病院（岐阜県）
八尾徳洲会総合病院（大阪府）

宇治徳洲会病院

地域のがん医療拠点を目指す

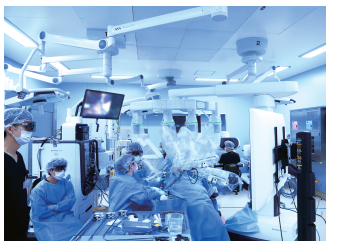
ダヴィンチ5導入し3台体制へ

宇治徳洲会病院（京都府）は「ダヴィンチ 5」を新たに導入、以前から有しているダヴィンチ Xi、ヒューゴと合わせ手術支援ロボット 3 台体制になった。救急医療で高い実績をもつ同院は、がん治療を新たな柱に据え、積極的な機能強化を推進。特徴の違う 3 台の手術支援ロボットを使い分け、各診療科で低侵襲手術を提供すると同時に、若手医師の教育や地域医療連携の推進に拍車をかける。

同院が導入したダヴィンチ 5 は、従来のダヴィンチ Xi から進化を遂げた最新世代機。1 例目を 9 月 29 日、大腸がん患者さんに行い奏功した。



3台の手術支援ロボットを背景に坂井センター長



新たに導入したダヴィンチ5による大腸がん手術の様子

坂井義治・統括がんセンター長は、「Xi と比べても画面で見える精細さが違い、切除したい箇所や剝離すべき層、細かな神経や血管が非常にクリアに認識できます。これまでは執刀医の熟練した『暗黙知』に頼っていた部分が、誰もが視覚的に理解できる『形式知』に変わるような感覚です。視野が明瞭になることで、無駄な出血を防ぎ、より安全で精度の高い手術が可能になります」と強調する。

機能面では、臓器や組織を引っ張った際の抵抗感を手元に伝える「フォース・フィードバック（力覚伝達）」や、先端がしなやかに曲がり、血管の凝固と切離をスムーズに行える最新デバイスも搭載し、安全性が格段に向上した。

若手医師の育成にも効果を発揮。ダヴィンチ 5 では指導医と若手医師が同時に操作・指導を行える「デュアルコンソール」を採用。また、従来機ではシミュレーターを使用する際、外部機器の接続や配線替えが必要だったが、ダヴィンチ 5 では練習プログラムが本体に内蔵してあり、手術室に患者さんが入室して麻酔がかかるまでのわずかな空き時間でも、操作トレーニングを行える。

坂井センター長は「2 台のコンソールを使って指導医の監視の下で安全に執刀でき、直前まで何度も手技を練習できます。効率的なトレーニングプログラムと相まって、若手外科医の成長スピードは確実に加速すると考えます」と手応えを語る。

将来的にはデジタル技術を活用した次世代の教育システムとしても期待を寄せる。ダヴィンチ 5 では、手術中の映像や操作ログデータが、匿名化されたうえで自動的にクラウドに集積される仕組みとなっている。世界中の何万件もの手術データや AI（人工知能）解析を活用することで、執刀医の操作の弱点を分析して最適な訓練プログラムを提示したり、手術中にリスクを事前に警告したりする高度な教育・支援機能の構築が見込まれる。

同院の 3 台体制化はダヴィンチ 5 と Xi に加え、アームが独立して広い可動域をもつヒューゴを併用する点が大きな特徴だ。患部の位置や解剖学的アプローチ、手術空間の広さなど、症例ごとの特性に応じて最適なロボットを選択して使い分けることができる。複数の診療科でロボット手術の需要が高まるなか、3 台の機器をフル活用することで、手術室の稼働率向上と待機期間の短縮を図る。

現在、同院では消化器外科を中心に、婦人科、泌尿器科、呼吸器外科など多岐にわたる診療科でロボット手術を実施。2025 年度は年間 200 件を超える実績を上げ、今年度は 300 件超えを見込むなど、拡大基調を堅持。また、同院は「がんゲノム医療連携拠点病院」の指定申請に向けた準備も進めており、大学病院や基幹病院との人材・技術交流を強化しながら、包括的ながん診療体制の確立を目指す。

坂井センター長は「早期回復・早期社会復帰を可能にする最新の手術環境が整いました。当院は救急医療で非常に高い知名度がありますが、これからは地域のがん治療の拠点としても大きな信頼を得たいと考えています」と意気軒高だ。

直言

小児外科手術数・斜視手術数・NICU「ほかいち」＝北海道で一番が3つある

115年の歴史をもつ「お産と子ども」の病院



天使病院（北海道）院長 山本 浩史（やまもと ひろし）

2025年11月から、徳洲会グループの仲間にしていただきました天使病院です。どうぞ、よろしくお願いいたします。

当院は1911年に開設され、今年で115年になります。時を同じくして仲間入りした日鋼記念病院も、同じ年の開設です。私は2002年に北海道大学第一外科から天使病院に派遣され、以来、この病院で働いています。カトリックの「聖母会」に始まり、「カレスアライアンス」への経営譲渡、医療法人「母恋」としての独立、母恋の社会医療法人の認可を経て、14年に新病院が完成しました。25年11月に徳洲会に入りましたので、約20年で3回の経営母体の変更を経験しましたが、そのたびに地域の皆さまと職員に支えられ、今日があります。

初期臨床研修の受験者数 今年は過去最高の29人に

1970年頃には、年間分娩数が3,000件を超えて日本一になったそうです。当時の札幌市の出生数の6分の1にあたります。現在は年間700件ほどですが、「地域周産期母子医療センター」として、北海道で最初に認可されたNICU（新生児集中治療室）15床、妊娠中のお母さんのためのMFICU（母体胎児集中治療室）6床、退院前の準備をするGCU（新生児回復期治療室）11床を備えています。産科医と小児科医が24時間常駐し、高齢での出産や、糖尿病や高血圧を合併した妊娠にも対応しています。無痛分娩のご希望も増えており、麻酔科医と協力して取り組んでいます。小児科は札幌市の二次救急当番も週1回担当し、NICUの24時間体制を守っています。

小児外科の患児の主治医は小児科医です。新生児や小児の全身管理に慣れた専門家が診ていることも、当院の特徴です。釧路や函館、帯広など全道各地からの搬送も受け入れています。

「ほかいち」とは「北海道で一番」を表す言葉で、この「ほかいち」が当院には三つあります。小児外科の手術件数、眼科の斜視手術件数、そして15床のNICUです。私が小児外科を開設した2002年、全身麻酔の手術は年間80件ほどでしたが、今では約330件になり、そのうち約20件は新生児の手術です。眼科は子どもの斜視手術に力を入れ、年間約120件行っています。どれも、お子さんとご家族の安心につながる仕事だと思っています。

04年度に始まった新医師臨床研修制度では、初年度は採用2人から手探りで取り組みました。現在は14人の初期研修医が学び、これまでの修了者は約100人になりました。他の病院で経験を積んで戻り、中心となって活躍している医師もたくさんいます。今年の受験者は過去最高の29人で、7人の枠に対し中間公表は11人でした。うれしい悲鳴です。他の職種の見学・実習も含めると、年間約800人が各部署を訪れます。若い力は、病院全体を元気にしてくれます。

徳洲会入りし救急応需が急伸 当院は確実に良い方向へ進行

徳洲会に入って一番変わったことは、救急です。25年4月に救急専門医が常勤となり、体制づくりを進めていましたが、徳洲会入りで一気に加速しました。救急救命士を採用し、今年8月に救急車を購入して、9月から稼働しています。昨年、1,750件だった救急車の受け入れ台数は、過去1年で2,000件を超えました。これから冬を迎え、さらに増えると思います。

当院は「お産と子ども」の印象が強く、成人医療は目立ちません。がんの化学療法や肝臓・膵臓・肺の手術など、当たり前に行っていますが、札幌の中心部には、がん、脳血管疾患、循環器疾患に強い病院が数多くあります。当院には脳神経外科も循環器外科もありません。整形外科、麻酔科、内科、外科、NICU、産科の医師、そして看護師も足りていません。雪が降ると、高齢の方の転倒が増え、救急要請が急増します。受け入れきれずに悔しい思いをすることもあります。経験できる症例は豊富ですので、全国の先生方、ぜひ当院にいらしてください。

最後に、徳洲会の仲間になって約1年、病院は確実に良い方向に進んでいます。職員の頑張りと、徳洲会のサポートのおかげです。“生命だけは平等だ”の理念の下、「母恋」から受け継いだ“皆さまに「ほっ」としていただける病院を目指し、「一歩前へ」”、そして“職員は財産”という言葉を大切に実践してまいります。

皆で頑張りましょう。

徳洲会栄養部会

「栄養情報提供」を促進

臨床WG拡大研修会開く

徳洲会グループ栄養部会の臨床ワーキンググループ（WG）は、オンラインで拡大研修会を開催した。128人の管理栄養士が出席し、栄養情報提供の取り組みについて情報共有や意見交換を行った。

栄養情報提供は、入院中の栄養状態や食形態、摂取状況といった情報を文書で転院先の病院や退院先の介護施設などに送付すること。切れ目のない栄養管理や摂食・嚥下（えんげ）サポートを行うものとして、国も診療報酬上で評価している。



オンラインで全国の管理栄養士が情報を共有。介護施設在籍者も

会の前半では、栄養情報提供の好例として3病院が自院の取り組みを報告。山川病院（鹿児島県）は地域で共通の栄養情報提供書を作成したり、事務作業を効率化したりして情報提供書の作成が増えた状況を説明した。札幌真駒内病院は、各種情報の入手方法や情報提供書作成時間の目安などを提示。「手間と時間はかかるものの、得るものは大きいです」と、意義の大きさを強調した。

最後は武蔵野徳洲会病院（東京都）が、栄養情報提供をテーマとする演題を発表した第29回日本病態栄養学会年次学術集会（1月30日～2月1日、京都）について報告。提供書のフォーマット見直しなど作成方法の簡略化を図ったり、他職種や近隣施設と連携しやすくしたりするなど工夫を示し、再構築したことで栄養情報書の作成件数が倍増したことを紹介した。

後半はグループディスカッションを実施。栄養情報提供書の作成で困っていることや、情報共有を円滑にするためのアイデアなどを話し合った。会のなかでは、あらためて部会としても積極的に取り組む方針であることを伝えるとともに、作成しやすいシステムに改善していることを共有した。

臨床WGリーダーを務める宇治徳洲会病院（京都府）の赤尾志・栄養管理室長は「正しい栄養情報を提供することは、とても重要。栄養部会嚥下調整食一覧表の作成や記載内容の標準化など負担軽減も図っているので、少しでも多くの施設に取り組んでほしいと思います」と期待を寄せた。

「睡眠×腸活」テーマに

札幌もいわ病院が市民講座



地域の方々を中心に68人が集まり盛会

札幌もいわ徳洲会病院は9月3日、院内で「札幌睡眠ラボVol.2」を開いた。睡眠の正しい知識を地域に伝える企画で、後平泰信院長（日本睡眠学会総合専門医）が発案者。毎回、睡眠と睡眠にかかわりの深い分野をかけ合わせた「睡眠×〇〇」をテーマに掲げ、企業や研究者とも連携し、講演などを通じて睡眠を多角的に伝えている。

今回は札幌ヤクルト販売と「睡眠×腸活」をテーマに実施。68人が参加した。まず同社の辻綾乃栄養士が「腸から健康を考える」と題し講演、腸内環境と、睡眠を含む健康とのかかわりを解説した。続いて後平院長が「働く人のための睡眠講座」と題し、睡眠不足が病気のリスクを高め、生産性低下による経済的損失を招くことなどを指摘した。質疑応答の時間も設け、睡眠と腸内環境の相乗効果や受診の目安などについて答えた。

後平院長は「寝ても疲れが取れないといった悩みを抱えていながらも、受診に至らない方が多くいます。気軽に相談していただけたら」と呼びかけた。Vol.3は11月21日に同院内で「睡眠×回復」をテーマに予定。

病気のはなし 238

若いうちから骨密度貯金を

大腿骨近位部骨折

大腿骨（だいたいこつ）近位部（足の付け根部分の大腿骨）骨折は、ADL（日常生活動作）を大きく損ない、高齢者が寝たきりになる原因のひとつだ。骨が健康な状態であれば交通事故など強いダメージを負わない限り、この部分を骨折することはまずないが、骨がもろい状態であれば些細（ささい）な衝撃でも折れてしまう。「まず骨折しないことが重要です。骨は年齢とともに弱くなります。とくに女性は閉経で骨を守る女性ホルモン（エストロゲン）が減り、骨がもろくなる骨粗鬆症（こつそしょうしょう）が急速に進みやすくなるため、注意が必要です」と天使病院（北海道）の小林正明・整形外科科長は警告する。

大腿骨近位部骨折は、寝たきりの期間をできるだけ短くするためにも、全身状態が良好であれば手術が第一選択。全身状態さえ良ければ高齢でも手術しADLを上げる意義は大きく、「当院では100歳前後の方に手術することもあります」と小林科長。

骨のもろさが原因の脆弱性骨折は、まず手首の骨折に現れ、次いで背骨（圧迫骨折）、上腕骨近位部、その後、大腿骨近位部に至ることが多いため、小林科長は「できるだけ手首の骨折などの段階で骨粗鬆症に気付き、治療することが大切です」と二次骨折予防を訴える。骨密度を若いうちに上げておくと、加齢による骨密度低下を抑制できることから、「若いうちから適度な運動とバランスの良い食事により、骨密度貯金をすることをおすすめします」と呼びかけている。

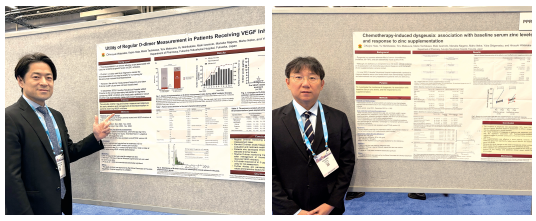


福岡徳洲会病院薬剤部

演題発表など学術活動に意欲

渡邊部長と秦副部長が「FIP2026」へ参加

福岡徳洲会病院薬剤部の渡邊裕之部長と秦晃二郎・副部長は、カナダ・モントリオールで開かれた第84回国際薬剤師・薬学連合国際会議（FIP2026、8月30日～9月2日）でポスター発表を行った。同部署は近年、渡邊部長の方針の下、部署全体で学術活動に励み、学会発表や論文執筆など精力的に取り組んでいる。



FIP2026で研究成果を発表する渡邊部長（左の写真）と秦副部長

渡邊部長の発表は「Utility of Regular D-dimer Measurement in Patients Receiving VEGF Inhibitors」（VEGF阻害薬投与患者におけるDダイマー定期測定の有用性）がテーマ。VEGF阻害薬は、血管内皮増殖因子（VEGF）という物質を不活発化することで腫瘍組織の血管新生を抑制する薬。がん細胞の増殖を阻害する効果が期待できる一方、血栓塞栓症をはじめ重篤な有害事象と関連することが知られている。

渡邊部長は、血栓塞栓イベントの診断に広く用いられているバイオマーカーにDダイマーを挙げながらも、その有用性がVEGF阻害薬で十分に報告されているのはベバシズマブを投与した患者さんのみで、「ラムシルマブなど、その他のVEGF阻害薬に関するエビデンスは限定的で、最適なモニタリング頻度に関する合意形成もなされていない」と指摘。自院で2023年12月にVEGF阻害薬投与後のDダイマー定期測定を運用方針として導入したことを紹介し、同方針が血栓塞栓イベントの早期発見・管理に及ぼす影響について検討結果を発表した。

診療記録から、定期測定の導入前群と導入後群に分けて評価した結果、Dダイマー測定率は5.5%から74.0%に大幅に上昇。VEGF阻害薬投与患者さんに対する血栓塞栓症の早期発見・早期対応につながる可能性を示した。また、Dダイマー値が1.0 μg/mLを超えるケースでは、追加の診断的評価や治療変更の契機となっていたことから、同値がリスク評価で臨床的有用性を有する可能性を示唆し、より安全かつ効率的な治療プロトコル（実施計画書）を確立するため、さらなる検討に意欲を見せた。

秦副部長は「Chemotherapyinduced dysgeusia: association with baseline serum zinc levels and response to zinc supplementation」（化学療法に起因する味覚障害：治療前血清亜鉛値との関連および亜鉛補充療法への反応性）がテーマ。まず、がん化学療法に起因する味覚障害について「頻度の高い有害事象」とし、患者さんの生活の質（QOL）や治療への参画意識を低下させる点を説明した。リスク因子には亜鉛欠乏が認識されているものの、化学療法との具体的な関連や、亜鉛補充療法のメリットに関する臨床的エビデンスが不十分な現状も指摘した。

そのうえで、自院では23年6月以降、新規のがん化学療法患者さんに対し、レジメン（治療計画）開始時に血清亜鉛値を測定し、亜鉛欠乏患者さんが味覚障害を生じた場合には、経口亜鉛製剤を投与するプロトコルを運用している取り組みを紹介。

同年12月まで新規がん化学療法レジメンを開始した165例を対象に、効果を検証したところ、ベースラインの亜鉛欠乏は味覚障害発症の有意な予測因子とは言えなかったものの、亜鉛補充療法は治療対象例の約半数で有効だったことを提示。

約半数で有効でなかった点については、「化学療法に起因する味覚障害の原因が多様で、亜鉛状態のみに依存するものではないことを示唆しています」と説明した。また、大腸がん患者さんで高い発症頻度だったことを明かし、薬剤側・患者さん側の因子に関するさらなる検討の必要性も指摘した。

今後の研究については、「支持療法の最適化に向けて、亜鉛療法の明確な適応の確立と亜鉛以外の原因の同定に焦点を当てるべきです」と締めくくった。発表を終えた秦副部長は「海外の薬剤師に自分たちの取り組みを紹介できたことは、とても貴重な経験になりました。さまざまな国の発表に触れ、新たな気付きも得ることができました」と振り返り、「この経験を今後の臨床や研究活動にも生かしていきたいです」と声を弾ませた。

専門性を高めていく風土醸成

同院薬剤部は近年、こうした学術活動を活発化。日々の業務で感じた疑問や気付きを研究につなげ、学会発表や論文として積極的に発信している。具体的には、学会発表は20年度5件だったが、25年度は18件に増加。論文は2報から6報となり、著書・総説などを含めると、さらに多くを手がけている。

日々の業務で感じた疑問や気付きを研究や業務改善につなげる活動は、各薬剤師の成長意欲も向上。認定・専門・指導薬剤師など資格取得者は延べ41人（20年）から110人（26年）に増加し、薬学博士の学位取得者も2人から5人となった。渡邊部長は「学術活動や資格取得を通じて、専門性を高めていく風土が少しずつ部内に根付いています」と笑顔。「学術活動を身近なものとして取り組み、一人ひとりが成長し、その成果を国内外に発信できる薬剤部にしていきたいです」と意気軒高だ。

徳洲会介護部会

九州・離島ブロックで初！介護主任・副主任研修開く



講義だけでなく他施設との交流も刺激に

徳洲会介護部会の九州・離島ブロックは特別養護老人ホーム薔薇の樹苑（福岡県）で、介護主任研修と副主任研修をそれぞれ開いた。いずれも集合参加とWEB参加のハイブリッド形式で、同ブロックでは初めて。

主任研修には10人が参加し、SWOT（強み、弱み、機会、脅威）分析からBSC（多面的に経営戦略を評価・分析する手法）の作成、労務管理、コーチング、法令順守、介護の質評価・改善、他部門との連携などをテーマとした講義を受け、最後に「介護主任として取り組む現場の課題」をテーマとしたグループワークを行い、管理者としての実践力を培った。

一方、副主任研修には18人が参加。徳洲会グループに対する理解や目標管理、介護倫理・職業倫理、ハラスメントなどをテーマとした講義を受講。最後に「研修の学びと介護副主任の役割の変化について」をテーマとしたグループワークを行い、利用者中心のケアを実践しながらも、現場のマネジメントも遂行するための知識・技術を磨いた。

終了後、参加者からは「役割を理解できた」、「より専門的な知識を学べて良かった」、「座学だけでなく、グループワークでの意見交換もあり、より良い学びができた」といった声が寄せられるなど、いずれも好評。研修の実施をサポートした福岡徳洲会病院の山下順子・在宅介護支援センター副センター長は「他の施設スタッフとの交流が刺激になった様子がうかがえ、開催して良かったです」と振り返り、来年度以降の継続を望んだ。

一般社団法人徳洲会の重田盟子・看護・介護部長補佐（介護事業部九州・離島ブロック長）も「次年度からはブラッシュアップした教育ガイドラインに沿って、多職種が参加できる研修を企画していきたい」と、続けていく意欲を見せた。

厚木市制70周年記念映画 湘南厚木病院がロケに協力

湘南厚木病院（神奈川県）は厚木市制70周年を記念しオール厚木ロケで制作された映画『キリコのタクト～YELL～』に、ロケ地として撮影場所を提供、同院スタッフがエキストラ出演するなど撮影協力した。

同映画は厚木市出身の音楽グループ「いきものがかり」のヒット曲である『YELL』がモチーフ。音楽教師と教え子たちとの絆や成長の物語を描いた作品だ。監督は雑賀俊朗さん、主演は鈴木京香さん。10月2日から新宿ピカデリーほか全国の映画館で上映。





病院屋上での撮影の様子（上）と、映画『キリコのタクト～YELL～』のポスター

同院での撮影は昨年8月。診療などに支障が出ないよう時間帯を調整し2日がかりで病棟や屋上でのシーンを撮影した。守矢英和院長は「雑賀監督から『イメージしていた以上の絵を撮れました』と言っていただきました。当院は『地域に根差した病院づくり』を掲げています。今後も地域医療に貢献し、地域のイベントなどにも積極的に協力していきたい」と意欲的だ。

羽生病院が「1日看護職・医療職体験」

県内外から高校生100人参加

羽生総合病院（埼玉県）は、高校生を対象としたイベント「1日看護職体験・医療職体験」を4回に分けて実施した。看護師、介護福祉士、薬剤師、臨床検査技師、診療放射線技師、臨床工学技士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を対象に、医療専門職を目指している生徒や、医療従事者に関心をもつ生徒が合計100人参加した。埼玉県だけでなく、栃木県など15校から応募が寄せられた。



スタッフのアドバイスを受けながらAED（自動体外式除細動器）を体験

参加者は髙橋暁行院長、佐藤あけみ看護部長による挨拶、病院紹介の後、各職種の仕事を見学・体験。スタッフの説明を受けながら、医療器具を操作したりした。その後、院内見学、BLS（一次救命処置）講習も行った。最初は緊張した様子がうかがえたが、次第にスタッフとの会話も弾み、質問も相次いだ。

参加者からは「夢が具体的に描けるようになりました」、「人の命を助けるという素晴らしい仕事であると、あらためて感じました」など、一様に満足する声が寄せられた。企画に携わった金子優子・副看護部長と田中千草・副看護部長は「看護職体験は20年以上前から、医療職体験は3年前から行っています。当院を初めて知る方も多く、医療の仕事はもちろん、当院を知っていただく機会にもなれば」と声をそろえる。

“未来の医療職体験フェア”開催

さいたま記念病院が高校生を対象に

さいたま記念病院は地域の高校生を対象に、「未来の医療職体験フェア2026」を開催した。将来、医療の世界を目指す高校生の進路選択を支援するのが目的。多職種の業務内容を説明したり、実際の医療現場・医療機器を体感する機会を設けたりと、進路選びに役立つプログラムを企画した。7校から1～3年生の計35人が参加し大盛況だった。



血管造影装置について臨床工学技士の説明を真剣に聞く生徒たち

当日は石川進院長の挨拶に続き、看護師、薬剤師、臨床検査技師、診療放射線技師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床工学技士、管理栄養士の計9つの医療職に関して、仕事の内容や1日の勤務の流れなどを各部門の担当者が説明。徳洲会独自の奨学金制度も紹介した。

この後、複数のグループに分かれて、各職種のもち場を訪れ、実際の医療機器や道具を間近に、説明を受けたり触れたりと体感。手術室ではガウンなどを着用し、腹腔鏡（ふくくうきょう）手術の練習キットで手術体験を行った。

終了後のアンケートに対して、多くの生徒が「とても満足」、「希望した職種に対して、ますます興味が湧いた」と回答。また「他の職種を知ったうえで将来の職業を選ぶ良い機会になりました」、「実際に病院の現場に入ることができ、インターネットで調べるのとは大きく違いました」など感想が聞かれ、好評だった。

WEB医療講演スケジュール

Facebookで公開中！

徳洲会グループ病院では、さまざまなテーマで医療講演を開催している。オンラインで受講可能な講演を徳洲会グループのFacebookで公開中。当該病院のホームページで参加方法などを要チェック！

南部徳洲会・宇治徳洲会病院の医学物理士

日本医学物理学会学術大会・放射線治療計画トライアルで1位と2位に

南部徳洲会病院（沖縄県）の飯田洋介・放射線部主任（医学物理士、診療放射線技師）と宇治徳洲会病院（京都府）の石原佳知・放射線治療科医学物理士長兼診療放射線技師長は、第132回日本医学物理学会学術大会（8月28～30日、新潟市）で行われた放射線治療の時間制限付き治療計画トライアル（APT）で、好成績を収めた。同学会から選出された医学物理士36人が競い、飯田主任は「トモセラピー」部門で1位、石原・医学物理士長は「OXRAY」部門で2位に輝いた。

飯田主任と石原・医学物理士長が栄冠



表彰式後、大会長の宇都宮悟・新潟大学医学部准教授（中央）と記念撮影する石原・医学物理士長（左）と飯田主任





それぞれ自院で使用している放射線治療装置（上からOXRAY、トモセラピー）

放射線治療では、放射線を照射する前に「治療計画」を立てる。がんなど病変に対する効果は最大限に、周囲の正常組織に対する影響は最小限にするためで、医師の診察後、放射線治療計画専用装置を用いて、最適な照射範囲や照射方法、処方線量、治療回数などを計算、決定する。

一般的に、計画の作成や装置の精度管理、照射は、医師と診療放射線技師が行うが、近年、放射線治療の多様化、高度化にともない計画作成のプロセスが複雑化していることから、両者に加え、医学物理士の活躍が期待されている。医学物理士は物理学や工学のスペシャリスト。その専門知識を駆使して、コンピュータが行う計算や設定についても確認し、患者さん一人ひとりの病変に合わせ、より適した照射を選択する。

日本医学物理学会は主催する学術大会で、医学物理士の治療計画にかかわる技術を競うトライアルを企画。同一症例（専用装置で撮影したCT画像）・共通条件（照射方法など）下で治療計画を作成し、DVHパラメータ（標的や周囲の臓器に当たる線量と、その体積の関係を示す指標）をもとに点数化する。

過去の同様の企画では、約1カ月かけて計画をつくる形式だったが、今回から新たにAPTとして実施。臨床現場で求められる“限られた時間で質の高い計画を立てる力”を競う狙いから、会場で共通の症例と条件が示され、制限時間2時間半で計画をつくり上げる形式に変わった。従来の点数評価に、早く提出するほど加点されるタイムボーナスを加えた。装置ごとに計算方式が異なるため、トモセラピー、OXRAY、TrueBeam、Versa HDの4部門に分かれ実施。

多くの症例で磨いた速さと質

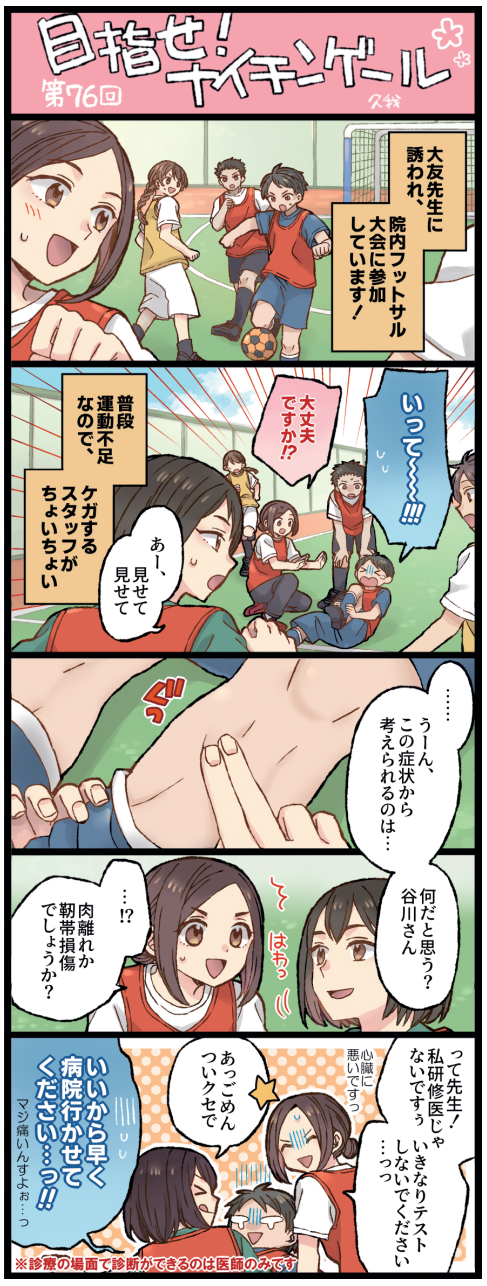
トモセラピー部門で1位となった飯田主任は、日頃から1～2時間で質の高い計画を立てることにこだわってきた。今回のAPTでも、その経験を生かし、4部門の受賞者のなかで最も高いタイムボーナスを獲得した。「日頃から多くの患者さんの治療に対応するため、治療計画のスピードと質にこだわってきました。それが実を結び、素直にうれしいです」と笑顔。

OXRAY部門で2位の石原・医学物理士長も「タイムボーナスのルールと、うまくかみ合いました」と、速さが奏功したと振り返る。「当院で治療計画最適化の担当は基本的に私ひとり。速く、数多く策定するのは、とても大事です」と話す。日本医学物理学会の理事も務めるだけに、「恥ずかしい成績は取れないという重圧がありました」と安堵の表情。

共に、制限時間を約1時間残して計画を提出。飯田主任は「受賞をゴールにせず、得たノウハウを後輩の指導やWEBセミナーを通じて、全国の技師、物理士に還元していきたい」と意欲的。石原・医学物理士長も、アジア・オセアニアの国際大会への参加を予定するなど、学術的な挑戦を続けていく考えだ。

医学物理士は、一般財団法人医学物理士認定機構が認定する資格で、放射線医療の物理的・技術的な課題の解決を担う。1987年に日本医学放射線学会が理工系大学の出身者を対象に認定制度を設け、96年に現在の名称となった。

2002年には、理工系大学の出身にかかわらず一定の条件を満たす診療放射線技師も受験できるようになった。資格保有者は6月時点で1,593人。がん診療連携拠点病院の整備指針で医学物理士の配置が望ましいとされ、医師の負担を減らすタスク・シフトの担い手としても期待が集まっている。



徳洲会体操クラブ

岡がアジア大会で銀4つ

名古屋病院応援団の声援受け

徳洲会体操クラブの岡慎之助が、日本代表として第20回アジア競技大会の男子体操（9月21～25日、愛知県）に出場、個人総合、団体、種目別の平行棒と鉄棒で、銀メダルを計4つ獲得した。また、開催地にある名古屋徳洲会総合病院の職員有志らが応援団を結成し、団体競技の日に会場で熱い声援を送った。



「悔しさを糧に世界選手権に全エネルギーを注ぎたい」と岡



団体で、あん馬を任された岡は「やりきって勝ちたかった」

大会の約3週間前に腰痛を発症するアクシデントに見舞われ、十分な練習を積めないまま挑んだ今大会の岡。個人総合では最後まで粘りの演技を見せ、銀メダルを獲得したものの、団体では最終種目の鉄棒で痛恨の落下を喫するなど、厳しい戦いとなった。

岡は金メダルには一歩届かなかった今大会を振り返り、「とても悔しい結果になり、自分のもっている力を100%出しきれませんでした」と胸中を明かした。けがの影響から厳しい調整が続き、大会終盤には疲労が蓄積。「練習不足を感じました。勝つところまでの準備がまだ足りていませんでした」と冷静に課題を見つめ直した。

大会を見守った新宅裕也コーチは、直前の腰の負傷など苦しい状況下での戦いを振り返りつつ、「ミスのない演技を見せた場面もあり、責任感や強さが付いてきました」と岡の成長を評価。指導陣側の課題として、コンディショニング管理を挙げ、「状態が良ければ必ず結果はついてきます。本人が力を発揮できるよう全力でサポートします」と語った。

また、応援団を結成した名古屋病院の職員有志らは、会場で岡の名前が入ったタオルを掲げ、熱い声援を送った。その姿に、岡自身も「SNSで見かけ、現地でもタオルを持っている方を見て、とてもうれしかったです」と感謝。観戦した職員からは「岡選手の活躍を間近で観ることができ、緊迫感を味わうことができました」、「岡選手の最後まであきらめない姿勢に勇気をもらいました」といった声が聞かれた。



名古屋病院の職員有志が応援団を結成して会場で熱い声援

第54回世界体操競技選手権大会（10月17～25日、オランダ）には、同クラブから岡と川上翔平が出場予定。岡は「今回、味わった悔しさを糧に、次の世界選手権に向けて全エネルギーを注ぎたいと思います。自分がチームをリードして、日本の体操界を盛り上げたいです」と力強く前を見据えた。

徳洲会グループの医学物理士在籍施設

札幌東徳洲会病院
日鋼記念病院（北海道）
羽生総合病院（埼玉県）
鎌ケ谷総合病院（千葉県）
千葉西総合病院
湘南鎌倉総合病院（神奈川県）
宇治徳洲会病院（京都府）
和泉市立総合医療センター（大阪府）
吹田徳洲会病院（同）
福岡徳洲会病院
南部徳洲会病院（沖縄県）

品川区主催の認知症啓発プロジェクト

大崎病院東京ハートセンターが参加



「認知症に対する正しい理解の普及に努めていきたい」と神部・看護部長（右）、大嶋看護師

大崎病院東京ハートセンターは、認知症に対する理解促進のため品川区が主催する「しながわ みんなで想う橙（オレンジ）プロジェクト」に参加、認知症啓発のシンボルカラーであるオレンジ色のお花紙で作成した花などで院内を飾り付けたり、相談先の窓口（在宅介護支援センター）などを掲載した『しながわオレンジガイド』（品川区発行）を配布したりするなど、啓発活動に協力した。

同プロジェクトは認知症基本法が定める認知症月間の9月に、品川区がさまざまな事業所などの協力を得て実施。同院は今回が初参加だ。

同院は9月の1カ月間にわたり、正面玄関の壁いっぱいにオレンジ色の鮮やかなお花紙で作成した花をハート型に飾り付け、患者さんに塗ってもらった品川区認知症啓発キャラクター“くるみちゃん”の塗り絵を掲示。受け付けや病棟も飾り付けを行った。

神部雅子・看護部長は「これまで高齢者施設の参加事例はあるものの、病院は初参加だと区の担当者から聞きました。当院も患者さんのなかには認知症の方がおられます。今後も認知症に対する正しい理解の普及に努めたい」と意欲的。医療連携室の大嶋美絵看護師は「啓発活動に協力するとともに、より多くの地域の方々に当院を知っていただきたいという思いもありました」と、これからも地域に開かれた病院づくりを目指す。